

研究ノート

終活問題をめぐって

岩田親静

問題の所在

近年、終活特集を行う雑誌をみるが増えている。また、お盆時期にはテレビでお墓や葬儀の問題を取り扱う番組も存在している。

ここでは昨今の終活問題の動向を確認し、それに対して寺院・僧侶はどうか対応すべきかを考えてみたい。

1、昨今の終活問題

ここでは近年の終活問題を、大まかに理論と実践の二点に分けて問題を整理してみたい。理論面では島田裕巳『0葬』（集英社 二〇一四）とひろさちや『終活なんておやめなさい』（青春出版社 二〇一四）が存在し、実践面では星野哲『終活難民 あなたは誰に送ってもらえますか』（平凡社新書 二〇一四）が存在する。三書は二〇一四年出版のものであり、昨今の動向を反映していると考えられる。

ここでは、まず、それぞれの書物の重要と考えられる箇所を上げてみたい。そのうえで、私見を述べていきたい。

2、島田裕巳『0葬』（集英社 二〇一四）

2-1①

死者とともに生きる必要は、もうない。

少し前まで、私たちは死者とともに生きてきた。というのも、死者たちは私たちと同居していたからである。もちろん、今でも死者とともに生きている人たちはいる。

2-1②

私たちはこれまで、人を葬るということにあまりにも強い関心を持ちすぎてきたのではないだろうか。それに勢力を傾けすぎてきたのではないだろうか。

それこそが日本の文化であり、死者を丁寧に葬ることは日本人の精神にかなってきたと言われてきた。

だが、社会は大きく変わり、死のあり方そのものが根本的に変容してきたことから考えれば、従来の方法意味をなさない。

極端な言い方をすれば、もう人を弔う必要がなくなっている。

遺体を処理すればそれでいい、そんな時代が訪れている。（八頁）

2-1③

人類以外の生物は、哺乳類であったとしても、仲間が死んだとき、葬式をしないのはもちろん、遺体処理さえしない。それは、人類に近いとされる猿でも同じだ。

その点では、仲間を葬るという行為が、私たちが人類の一員であることの証とも言える。人類である限り、葬儀を

営むのは当たり前のことである。現代人もまた、その伝統を引き継いでいる。(一八頁)

上記は葬儀不要論である。これまでも島田氏は『葬式はいらない』を主張してきたが、死者の否定を展開し、遺体処理だけ十分と主張している。

「葬儀・墓のインフレ化」、「檀家制度の変化」以上の二点は従来から指摘されてきたものであり、ここでは特段ふれることに値しない。

しかし、高齢化と葬儀の関係についての指摘は重要な問題である。

2-4

高齢での死はそのまま十分に「大往生」と言えるもので、遺族も故人は現世での生活を満喫し、謳歌した上で亡くなったと考えている。果たしてそうした死者のために、遺族が功德を積み、それを回向として振り向ける必要があるのだろうか。そんな疑問がわいてくる。

(中略)

初七日や四十九日の法要が葬儀の際にくり上げて行われるようになり、年忌法要が行われなくなってきた背景にもこうした事態が関係している。死者を成仏させるためには、法事法要が必要だという観念が薄らいでいるのである。

(一五〇～一五一頁)

2-5

昔は、今日のように、多くの人が長寿をまっとうできる状況にはなかった。乳幼児の死亡率も高かったし、病気や

災害、あるいは戦争などで、若いときに命を落とすことが少なくなかった。高齢での大往生を望んでも、それが容易には実現されない状況にあった。

そうした状況では、それぞれの死者はもつと生きたいと思いつつ亡くなり、無念さを持っていることが前提となっていた。その無念さを晴らすために、残された者が供養を続け、その功德によって西方極楽浄土へ導いていく。そうした浄土教信仰のストーリーが、広く受け入れられた。

（中略）

しかし現代のように、現世における暮らしが幸福で安楽なものになったなかでは、現世を穢土ととらえる感覚は生まれにくい。浄土信仰の基盤は失われているのである。（一五三―一五四頁）

2―④、2―⑤は、死者はもつといきたいと考えていたが「大往生」「長寿」が出来ない無念さがあることが浄土思想、葬儀、法事の前提であると考えている。「大往生」「長寿」が出来る現代においては葬儀、法事をする必要はないと主張している。

その上で、自然葬、マイ自然葬を紹介し、0葬を提示している。

2―⑥

自然葬とは、遺骨を細かく砕いて海や山、あるいは川などに撒くものである。亡くなったら自然に還るということで、自然葬という言い方がされている。火葬された骨をそのままくわけではないので、散骨という表現は不適切かもしれない。（一七二―一七三頁）

2-1⑦

マイ自然葬は自前の自然葬になる。遺骨は自然葬を実施する人間が自分で、あるいは業者に依頼して粉にしてもらい、それを海なら水溶性和紙に包み、山ならそのまま撒いてしまうのである。(一七五・一七六頁)

2-1⑧

ただ、私は、自然葬のさらに先があるように思っている。それが「0葬」である。0葬は、今求められている究極の葬り方かもしれない。(中略)

火葬の場合にも火葬した時点で終わりにしたらどうだろうか。

遺骨の処理は火葬場に任せ、それを引き取らないのである。

これは、土葬し終えた状態と同じになる。

それが0葬である。(一七八頁)

2-1⑥、2-1⑦と自然葬、マイ自然葬と散骨的な方法を紹介したうえで、0葬を主張している。この0葬では後に曹洞宗大本山総持寺祖院に火葬場の残骨を処理する業者の団体が建立した「全国火葬場残骨灰諸精霊永代供養塔」があり供養されていることや他にも残骨の最終処分場があることを示して「火葬された骨が最終的になんらかの形で供養されるのであれば、問題はない。少なくとも、先に述べた本山納骨と変わらないし、永代供養墓に合祀するのと同じである。」(一八〇頁)と述べている。その上で、

2-1⑨

0葬などにされたら自分の存在がすぐに忘れられてしまうと考える人もいるかもしれないが、私たちは墓があるか

ら故人のことを思い出すわけではない。思い出される人は、どんな環境にあっても思い出されるものだ。（一八三頁）

2-1⑩

「0葬は人の葬り方ではない。それは遺体処理にすぎない」と言う人もいるだろう。0葬に反発し、「人を弔うということは、単なる遺体処理ではない」と強く主張する人も出てくるだろう。

だが、大往生の時代においては、遺体処理で十分なのではないだろうか。八〇歳、九〇歳、さらには一〇〇歳まで生きた人ならば、もう十分に人生を満喫し、生を謳歌したと言える。（一八三・一八四頁）

2-1⑨で墓の存在を否定し、2-1⑩では長命であることを理由に「単なる遺体処理で構わないと主張している。これは少子高齢化した日本、後継ぎがいらない人々が増えていく社会においては、ある種の説得力のもつものに見えるかもしれない。しかし、遺体、骨を物と考えることにより成り立っている。

その上で、島田氏は伊藤栄樹『人は死ねばゴミになる』を紹介している。

2-1⑪

著者の家は浄土真宗の門徒であったが、伊藤は「しかし、仏教という宗教を信じているわけではない。僕は、神や仏とか自分を超えたところに存在するものにすがって心のなぐさめを得ようという気持ちにはどうていなれそうもない」と告白している（一八六頁）。

と述べ、信仰を有さない人々にとって葬儀は、「霊に向かって哀悼の意を表すことが、故人や遺族に対す礼儀だとわきまえているから」（一八七頁）行われていると規定している。

これは信仰心がない人が増えることは、葬儀の必要性がゆらぎ、それに伴い今後の多くの寺院にとって運営が厳しくなっていくことを想定させる。

以上、鳥田氏の意見を見てみると、死者の存在を無視するもしくは否定することで成り立っていることが分かる。

3、ひろさちや『終活なんておやめなさい』（青春出版社 二〇一四）

3―①

終活というのは「俺はここまで家族のことを考えていたのだ」ということを訴えたいがためのアライワークにすぎないのです。（三二頁）

3―②

葬式の仏教的な意義（そんなものはないのですが……）を説くならまだしも、現代のお坊さんは「食う」ために葬式をやっているのです。たしかに、高い戒名料、値の張る読経料をとるのですから、お坊さんにとって葬式はきわめて効率のよい「食い扶持」なのでしょう。

しかも、実働時間も短い。諭えていえば、会場にちょっと顔を見せて、場を賑わせるタレント司会者みたいなものです。

葬式が仏教行事だというなら、死体のお清めから、死に装束の着付け、葬式に関するいっさいの取り仕切りまで、すべてやるのが筋というものでしょう。

そのあたりは葬儀社にまかせて、読経と法話ですませている現状では、到底、お坊さんが葬式をやっているとはい

えないのではないかと思うのですがどうでしょう。（四三頁）

3―①は終活そのものの否定であるが、ひろさちや氏にとって遺産問題と葬儀、墓を中心遺言書的なものとしてとらえているように思われる。（三二頁）リビング・ウィルとは、葬儀も含め、臓器提供や献体などといったものも含まれており、遺言書だけの問題ではないと思われる。

また3―②では葬儀の布施に対する、僧侶の仕事量が問題とされている。この点は、納棺経、枕経、七日経といったこまめな対応やグリーンケアの必要性やそれに伴う家族・親族への精神状態を理解する研修といったものが従来大切にしてこなかったための反応ではないだろうか？

3―③

ほとけさまが死者の靈魂を浄土に連れて行ってください。それを信じられたら、靈魂の処理についてあれこれ考える必要はなくなります。（五六頁）

3―④

前にも少し触れましたが、私自身はこう考えています。私は浄土宗の人間ですから、阿弥陀仏のお浄土を信じています。死んだその瞬間にお浄土に生まれ変わり、阿弥陀仏のもとで教えを受け、仏教を学ぶ、わくわくしますね。もちろん、この世になんの怨みも、未練もありません。

浄土宗にかぎらず、仏教の考え方とは基本的にそういうものだと思うのです。しかし、現実はどうでしょうか。（一三〇頁）

なぜ、いまのお坊さんは「本当のこと」をいわないのか。それが罪深いことだと気づいていないのでしょうか。靈魂は荒れている。鎮魂が必要だなどというから、怪しげな霊媒師や除霊師にひっかかるのです。

「亡くなった人はすでにお浄土におられます。安心してください」

といったら、そんなインチキ商売は一掃されます。誰もが穏やかな気持ちで死者を送ることができます。私たちが死者に対してすべきもつとも大事なことは、「忘れてあげる」ことです。(一三一頁)

浄土教を信じるすべての人々は、この世を捨て西方極楽浄土へ赴くことを願う(厭離穢土欣求浄土)のでよいが、すべての仏教がこのような考えではない。これに関して、末木文美士博士は左記のように法華経の見宝塔品での過去仏である多宝如来と現在仏である釈迦牟尼仏との関連を考えている。

末木文美士『仏典をよむ 死からはじまる仏教史』(新潮社 二〇〇九)

その多宝如来の招きに応じて、釈迦仏はその宝塔に入り、多宝如来と並んで坐る。これは二仏並座と呼ばれ、絵画や彫刻でよく表される場面であるが、このように多宝如来は釈迦仏とまったく同等の位置づけを与えられていて、決して単に釈迦仏を讃嘆するだけの補助的な存在ではない。いわば、生者である釈迦仏は死者である多宝如来と一体となることにより、合体・変身して巨大なパワーを発揮することになる。それが如来寿量品の久遠の実仏なのである。死者は単に不在で、無力なのではない。もしそれを言うならば、常に死に脅かされる生者こそ無力ではないのか。生者は死者と合体することによって、はじめて永遠の力を獲得する。(七五頁)

3-⑥

戒名は仏門に入ったことを証すもの、つまり、出家したことの証です。死者は在家のまままでほとけさまにお浄土に連れて行っていただいているのに、どうして出家する必要なのでしょう。（五七・五八頁）

戒名に関しては鈴木隆泰博士の『葬式仏教正当論』（興山舎 二〇一三）に第五章（一一二～一二二頁）に詳しく論じられているが、その結論だけ列記すると

一、日本では、亡くなった方を仏さまとして敬う伝統がある。それは決して俗信ではなく、正当・正統な仏教である。

一、仏教では、仏に成ると名前が変わる。仏を俗名で呼ぶことは堅く禁じられている。

一、新しい名前をお付けしなくてはいけない。それが、死後に授与される戒名（法名、法号）である。（一二二頁）

3-⑦

インド人は輪廻というものを信じています。死者は赴いた死後の世界で七日ごとに裁きを受け、四十九日目でその行き先が決まる。つまり、どこかの世界に生まれ変わります。（中略）

まあ、どこの世界に生まれ変わるかは別にして、死後四十九日が経てば、輪廻するわけですから、墓などつくっても意味はないということになりませんか。墓参りなんていうのは、「主」のいない空っぽの場所に手を合わせているのですから、滑稽な図としかいいようがありませんね。

ただし、お釈迦様の墓はあります。しかも、立派な仏塔（ストゥーパ）まで建っています。たしかに、仏舍利は大事にされているわけです。その理由は明解。お釈迦様は輪廻することがない、生まれ変わることがないからです。

(中略)

こうした正しい仏教の考え方からすれば、墓など恐れ多くてとてもじゃないがつくれぬ、という気持ちになりませんか？ 墓をつくるということは、自分をお釈迦様や偉い弟子たちと同格に置くということです。

墓が輪廻をしないことの象徴として存在するならば、我々一般の人々も輪廻しない存在と受け止めたことになる。

すると法事も回向も必要がなくなるのである。故に、この問題は重要といえる。中村元訳『ブッタ最後の旅』（岩波書店 一九九五）では、

アーナンダよ。これ等の四つの者は、ストゥーパを造って拜まれるべきである。其の四つと言うのは、何であるか？ 修行完成者・真人・ブツダに就いては、人々が彼のストゥーパを造ってこれを拜むべきである。独りで覺りを開いた人（独覺）に就いては、人々が彼のストゥーパを造って是を拜むべきである。修行完成者の教えを聞いて実行する人に就いては、人々が彼のストゥーパを造って是を拜むべきである。世界を支配する帝王に就いては、人々が彼のストゥーパを造って是を拜むべきである。

そうして、アーナンダよ。どのような道理によつて、修行完成者・真人・正しくさとりを開いた人については、人々がかれのストゥーパをつくつてかれを拜むべきであるか？ アーナンダよ。これは、かの修行完成者・真人・正しくさとりを開いた人のストゥーパであると思つて、多くの人は心が浄まつて、死後に、身体が壊れてのちに善いところ・天の世界に生まれる。アーナンダよ。かれのストゥーパをつくつてこれを拜むべきである。

(中略)

又、アーナンダよ。どの様な道理に依つて、独りで覺りを開いた人（独覺）に就いては、人々が彼のストゥーパを

造つて是を拜むべきであるのか？

アーナンダよ。〈是は彼の修行完成者・真人・正しく覺りを開いた人の教えを聞いて実行した人のストウパーである〉と思つて、多くの人は心が浄まる。彼等は其処で心が浄まって、死後に、身体が壊れて後に、善い所・天の世界に生れる。（二三二・一三四頁）

との書かれており、修行完成者・真人・ブツダや独りで覺りを開いた人（独覺）に関しては、ひろ氏の説は正しうである。ところが、修行完成者・真人・正しく覺りを開いた人の教えを聞いて実行した人も「ストウパーをつくつてかれを拜むべきである」とされている。

われわれも仏教信仰を有した存在であるし、戒名を得た人々は仏弟子であることからこの指摘は重要であろう。特に墓を拜むことによつて生じる効果「多くの人は心が浄まって、死後に、身体が壊れてのちに善いところ・天の世界に生まれる。」に関しては重要であると考ええる。

4、星野哲 『終活難民 あなたは誰に送つてもらえますか』（平凡社新書 二〇一四）

4-①

いま社会は「個人化」が進んでいます。それは家族や地域といった、自分を取り巻きときに支えてくれた共同体の力が弱まり、あらゆる事柄を自分自身で受け止めることが否応なく求められる、自己責任が声高に主張される社会です。個人では本来どおうしようもない、国や社会が受け止めるはずの責任までもが個人にのしかかります。死の重み、受け止めもまた個人に委ねられます。かつてのように地域共同体や家族が死者を弔い、「ご先祖様」として死に意味づけや永続性を与えてくれることは期待薄です。個人化こそが、終活難民発生の背景なのです。

そこで、介護が家族に頼り切るのではなく、介護保険によって社会で支えていく社会化の方向を目指したように、葬送も社会化できないかと考えました。……（一六頁）

4-②

だれが祭祀継承者になるかよりも、もはやいかにして祭祀継承者そのものを確保するかが大きな問題、より深刻な問題なのであり、少子化と非婚化がその継承を一層難しいものとした。子どもがいない、子どもが娘だけ、生涯を独り身で暮らすといったことがざらになったのである。人口減少社会は、跡継ぎ不在が当たり前となる社会なのである。継承の困難への対応こそが脱継承墓であり、散骨であった。

さらに最近の墓の特色として、東洋大学教授・井上治代氏は墓利用者への意識調査を実施した結果から「先祖とは祖父母の代まで」「子どもにも墓を継ぐという負担をかけたくない」などの意識変化がみられると分析する。墓はかつてのような「先祖」を供養するものではなく、近親を追慕する場に変容していると主張している。

（中略）

継承者の不在に伴う脱継承墓の普及、近親追慕の場という墓の変容はすなわち、「永続性のある先祖」という意識が薄れていくことを意味しているといつてよいだろう。（四四頁）

4-③

最後にもう一つ指摘しておくべきは、玉川氏も指摘するように「調査」の質問の中に「自分のために必要と思うサービス」という回答を求めるものがいくつかあることである。たとえば「あなたが希望する葬儀執行やお墓の用意、遺品整理等の情報提供や生前相談等の支援やサービス」を自分のために必要だと思うひとはゼロだったのに対し、家族のために必要だと思う人は四四・七%だった、など。このことは産業、市場に諸問題の解決手段を求めつつも、その大枠においてはやはり葬送の主体に家族を前提としていることをうかがわせる。（七一頁）

意識調査の結果分析から、生前契約を必要とする人々は、高齢化がますます進む今後、子どもの有無にかかわらず確実に増えていくものと推察された。特に子どもがいても意識的に生前契約を利用する人々の存在は、葬送の主体は家族であるべきだという社会規範が変化しつつあることをうかがわせると同時に、生前契約が家族機能を家族の「外」に委ねる外部化の重要な選択肢の一つとして位置づけられていることを示していた。

家族、特に都市部の家族をみた場合、かつて家族内で行われていた様々な機能を行政や民家のサービスを購入する形で外部化するようになった。たとえば、子育てにおける保育所の利用や、料理における外食・宅配などの利用、高齢者介護での介護サービス利用などであり、もちろん業者に対価を支払うことなどで葬儀を執り行うこともその一つに挙げられる。家族機能を担う能力が低減したことから、やむなく機能を外部化する側面と、一方でたとえば経済的余裕ができたことで家事代行サービスを購入し、そのことで生み出された時間を余暇やボランティアにあてる友人らと時間を共有するといった、家族の「外」と関係性を構築するための手段、自己の満足度を高める手段という積極的な選択としての側面がある。

やむなくと、積極的にという両面。とするならば、葬送の分野においても家族機能の外部化には両面があることになる。今後一層進んでいく高齢単身世帯の増加とは、これまで述べてきたとおり家族機能の大半を家族以外の「外」に頼らざるえなくなる世帯が増えることを意味しており、そうした状況のもとでの葬送の外部化は、死の個人化に対してやむなくという状況適合的な対応と主にとらえられてきた。だが、そうではなく葬送の主体を積極的に選ぶという、死の個人化に対する新たな可能性が存在しうることを示唆するのではないか。（一二二～一二三頁）

上記の指摘で見えてくるものは、人口減少社会を迎え、個人化傾向である。家族・近親への思いが存在し、自身の

ためだけでなく子や家族への経済的・精神的負担を減らすためにリビング・ウィルの必要性があることを示している。そのうえで、家族に頼れないもしくは頼りたくない人々が増加しつつあり、家族の機能を担う存在が必要となってきたことを指摘している。

本書ではNPOの存在に特に注目している。(一六六頁)また、寺院も生前契約を行い葬儀の他の各種契約解除や家財処分のサポートなどを行っている妙瑞寺(菊地泰啓住職)や任意貢献契約を結んだ経王寺(互井観章住職)の活動にも触れている。

5、まとめ

島田氏は、葬儀費用の問題や檀家制度が社会変化により変わっていることを指摘しているが、死者の存在を無視するもしくは否定することが最大の問題点である。

この点は、星野哲『終活難民 あなたは誰に送ってもらえますか』では、下記のような表現をし、死者の存在を肯定し、さらには申う意義も提示している。

肉体は消滅しても死者は残された者の心の中に生き続ける、とよくいわれる。靈魂や死後の世界の有無といった結論を出しようのない問いは別にしても、精神的な意味合いで死者が他者の中でその存在を主張し続けるのだと筆者も思う。個人的な感想だが、晩年、年に数回しか会うことのなかった父が、その死後になって筆者の中で存在感を増した。折に触れて思い出すのである。父の死は、「私」という他者がたぶん完結すべきものなのだと思う。申うという行為は、その手段としてある。

下線部分のような考えは、上原専祿博士や若松英輔氏、末本文美士博士などの指摘が存在する。

上原専祿博士は「死者」との共存・共生・共闘を主張している。（上原専祿著作集一六『死者・生者』評論社 一九八〇年 四四・四五頁）

若松英輔氏は「死者はどこにも過ぎ去らない。いつも私たちの傍らにいる。死者にとつて、生者を守護することは、比すべきものなき誇り高い使命である。」と述べている（涙のしずくに洗われて咲きいづるもの』河出書房新社

二〇一四 二二頁）

末本文美士博士はすでに『仏典をよむ』の箇所でも指摘したが、『仏教VS倫理』（筑摩書房 二〇〇六）では「死者との関わりは、もちろん時間とともに変化する。次第に忘却され、関係が薄くなっていき、それとともに、死者は単なる不在ではなく、生者を温かく見守るように変わっていくことが多いであろう。しかし、そう簡単に生者を安心させてくれる死者ばかりではない。いつまでも生者を攻め続ける死者もいるであろう。アウシュヴィッツやヒロシマの死者のように、永遠に人類を告発し続ける死者たちもいる。」（一七七頁）

ひろ氏の主張では、戒名や墓の否定が行われている。現在の日本の墓参りの習慣は強いものがある。すぐに、これが崩壊するとは思われないが、人口減少社会を迎えた日本において墓を肯定的に捉える人々が減少していくのは事実かもしれない。本来的には、散骨であろうと樹木葬であろうと日本仏教的には回向の対象であるから問題はないかもしれない。

一方で法華経は死者とのかかわりを大切にする。死者たちの過去の業績・英知やパワーが現在の世界に反映されていると考える経典だとするならば、尊崇の念を示すことは必要だと思われる。その点において、墓の重要性は考えるべきものであろう。

星野氏指摘により、家族に頼れないもしくは頼りたくない人々が増加しつつあり、家族の機能を担う存在が必要となってきたいるとするならば、その受け皿としての寺院の役割を考える必要があると考える。この点では、今後、生前後見人制度も含め多くの制度の運用に関しても寺院側が勉強・研究する必要があると考える。